

漫述（佐久間象山）

謗<sup>そし</sup>る 者<sup>もの</sup>は 汝<sup>なんじ</sup>の 謗<sup>そし</sup>るに 任<sup>まか</sup>せ

嗤<sup>わろ</sup>う 者<sup>もの</sup>は 汝<sup>なんじ</sup>の 嗤<sup>わろ</sup>うに 任<sup>まか</sup>せん

天公<sup>てんこう</sup> 本<sup>もと</sup> 我<sup>われ</sup>を 知<sup>し</sup>る

他人<sup>たにん</sup>の 知<sup>し</sup>るを 覓<sup>もと</sup>めず

謗者任汝謗 嗤者任汝嗤  
天公本知我 不覺他人知

解説 鎖国攘夷の論が喧騒<sup>けんそう</sup>をきわめる中であつて、象山一人開国進取説を唱えたので、世間の非難と嘲笑とを一身に浴びた。しかし、象山は信ずるところがあつて意に介さなかつた。この詩は、その心境を歌つた詩。

語釈 ※漫述 〓 なんとはなしに自分の心もちをいいあらわす。

※謗 〓 他人を悪く言う。非難する。※嗤 〓 あざわらう。※天公 〓 天の神、天帝。※覚 〓 さがし求める。

通釈 この自分に対し、悪く言うものは気のすむまで謗るがよいし、あざわらう者もまた、心ゆくまで嗤うがよい。天の神だけは、もちろん私の正しさを理解していただくさる。だから、他人に弁解して、私を知つて貰おうとは思わない。